

評者◆半田正樹

モリス社会主義を、混迷する現在に位置づけ直す意欲作——「共同体社会主義」は「究極の近代」IT社会を超えられるか

ウィリアム・モリスのマルクス主義——アーツ&クラフツ運動を支えた思想

大内秀明

[平凡社](#)

十九世紀後半のイギリスで活動したW・モリス。日本でも大正デモクラシー期には、モリスの思想が大いに関心を呼んだ。それからほぼ一世紀。モリスは、資本制経済社会に代わる社会を構想した思想家というよりも、アーツ&クラフツ運動の提唱者として、装飾デザイナー・工芸家として定着している。

思想家・運動家としては忘れ去られ、暮らしの空間に癒しと愉悦をもたらすアーティストとして残ったモリス。

本書は、このようにモリスに流れた百年の時間を取り戻し、モリスを正当に位置づけなおそうとする意欲作である。しかもモリスの生活日常における美を至上とする姿勢と、近代の相対化をめざす思想とが一体であることを再確認しつつ、もう一つのオルタナティブの闡明を試みる点に最大の特徴がある。

二十一世紀を迎えて十数年。わたしたちは世界史的な大転換の直中にある。日本では「失われた二十年」に加えて、「三・一一」の複合厄災が、近代社会総体の根源的・文明史的転換の必然性と必要性を明らかにした。世界的な広がりでは、アメリカ発のグローバル金融危機とユーロ圏におけるソブリン危機に、近代資本制経済社会が直面するただならぬ問題が見てとれる。

しかし、社会主義として表象されてきた、近代社会を相対化する思想と運動も、近代社会それ自体と同様に混迷の度を深めている。

社会主義は十九世紀から現在まで、種々のバリエーションをもちつつ、大きくは西欧先進国における国家主導型経済政策を特徴とする社会民主主義と「プロレタリア独裁」を核心とする旧ソ連型のマルクス＝レーニン主義としてとらえられてきた。あるいはこれに労働現場の発するエネルギーを重視するアナルコ・サンディカリズムの系統が加わってきた。けれども、これらはずいに近代の超克にたどりつくことはできなかった。

著者は、こうした状況の中、近代資本制経済社会のオルタナティブを構想する際に参照すべきものとしてモリス社会主義論にねらいをつけた。

では、モリス社会主義の固有性とは何か。

何よりも、芸術の凝集力を支えとする社会の実現をめざす点にある。国家による計

画的な経済政策を恃んだり、党による国家権力の掌握といったいわば剛の社会ではなく、生活日常をファイン・アーツとクラフツでくむことを理念とする柔の社会である。「生活の役に立たないもの、美しいと思わないものを、家に置いてはならない」というモリスの警句がこれを象徴する。その背景にあるのは、機械制大工業による大量複製品とは違う、ものづくりの匠・職人が手がける工芸品のもつ情趣や香りを至高とする構えである。これは「芸術は労働における人間の喜びの表現である」ととらえ、資本制経済の賃労働の廃絶を透視したことも通底している。モリスは労働力商品化の意味を「富を創造する機械」ととらえた。

しかも本書は、こうした視座が、モリスがマルクスの著作から、とくに『資本論』(第一巻)の章編三絶を通して獲得された経緯も明らかにしている。また日本で『資本論』が紹介されたのが、モリスによる解説を山川均が「大阪平民新聞」に連載したのが最初だったことも突きとめた。

ところで、モリスの社会主義は、中世の手工業の復権をめざす点において「ギルド社会主義」であり、ギルドという協同と連帯と自治による運営に焦点をあてる点において「共同体社会主義」という側面ももつ。

すなわち、いまモリス社会主義を指針におくことは、ロシア革命後にマルクス＝レーニン主義で塞がれた社会変革の可能性を開こうとして、結局挫折してしまった前世紀後半の新左翼の位相とも違う大胆な試みと読める。いわば「科学から空想へ」と反転する趣さえたよう。

しかし、モリス本人は十九世紀におさまる人だったわけではないにせよ、二十一世紀の現在が彼の生きた状況とは違うことも忘れてはなるまい。

匠の技・職人の仕事から直ちに想起されるのは、例えば「第三のイタリア」である。彼の地の現状は、グローバリゼーションに翻弄される姿だ。グローバル化の大波に対する防波堤をいかに「工夫」できるのか。また、古代ギリシャ以来、人間の活動はプラクシス(主体的所作)とポイエシス(被拘束的所作)に分けてとらえられてきたが、職人の技はポイエシスに分類される。外部から与えられた素材を前提にこれに拘束される「労働」に過ぎないのである。この点をどう超えていくのか。

さらに著者は、モリス共同体社会主義をポスト工業化の「知識社会」に擬えてもいるが、コンピュータ・ネットワークが、いわゆる形式知を時空を越えて組み替え、蓄積するものの謂であるとすれば、匠の技に似あう暗黙知の世界とは異質であることを透視しておくことも必要である。IT社会は、まさに「究極の近代社会」という側面をもつのを認識することこそ不可欠だと思われるからである。

(東北学院大学教員・現代資本主義論)